

当財団の「アド・ミュージアム東京」資料室には、さまざまな企業PR誌が所蔵されています。
その中から優れたものを取り上げ、それがどのような企業個性を表し、時代を捉えているかを探ります。

東京放送『調査情報』1975年

1975年は、沖縄海洋博が開催され、山陽新幹線が博多まで開通した年です。『複合汚染』がベストセラーになり、ベトナム戦争が終結しました。フランスで第1回先進国首脳会議（サミット）が開かれた年でもあります。

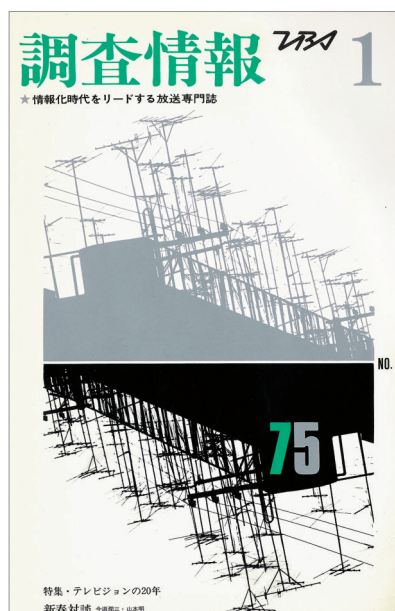
『調査情報』の特長は、視野の広さと話題のフレッシュさです。役に立つ情報が具体的なデータを交え提供されています。そして一企業のPR誌というよりも、放送関係者がより深く考え、前進するための思考の場として提供されているようです。企業の志を感じます。1958年に創刊され、現在も継続して発行されています。

放送をめぐる多様な論考とバラエティに富んだ連載

第190号となる『調査情報』1975年1月号の〈新春対談・昭和五十年をむかえて〉は、TBS会長・今道潤三と同志社大学教授・山本明の対談で、TBS-TVがスタートして20周年を迎えた時点での回顧と抱負を語ります。

〈年表 テレビジョンの20年・1〉は、昭和30年から35年までの6年間のテレビの社会的位置づけ、視聴状況、代表的な番組、特筆すべき番組、世の中の出来事などをコンパクトに解説します。1年ごとに、その年のテレビの状況が浮き彫りにされます。例えば昭和30（1955）年は、全国のテレビ契約台数が約5万台で、その半数は「家庭」ではなく「喫茶店」「街頭」であったこと、それが番組内容に反映していたことを記します。

連載〈かくて映像はとらえられた・1 イの字の物語〉青木貞伸（放送評論家）は、日本におけるテレビジョンの生みの親・高柳健次郎についてノン・フィク



1975年1月号表紙

ション風に記述しています。「無線電視法」（テレビジョン）の夢を抱き、研究に取り組む苦難の過程が詳述され、高柳健次郎の執念のすさまじさを伝えます。この人の努力があって日本のテレビジョンは生まれたのだとわかります。

新連載〈JNNからの発言・変身めざすローカルテレビ〉桐原久（南日本放送テレビ局長）は、現場から問題点を含め放送の実情をそのままレポートします。鹿児島弁でしゃべる若者がほとんどいないことやコミュニティ形成の一つの核としてのテレビ局づくりなど、ローカル局ならではのトリアルが記されます。

〈ニュースの視点・1 坂已知夫〉は、田中角栄自民党総裁誕生から退陣までのマスコミ

報道のあり方について疑問を提起しています。マス・メディアの報道内容、記者の洞察力を問い、今後のあり方を自ら模索しています。

〈ひいき考 ABC パーソナリティ・中村鋭一にきく〉は、タイガース狂々祖である中村鋭一が、阪神が優勝できなかったことにより千人の見守るなかで頭をツルツルに丸めたことを面白い語りで弁じます。「阪神ファンというのは、いわば悪女にひっかかった男みたいなもんや。こんな女とかかわっていたら、社会的地位も家庭もメチャメチャになってしまう」という嘆きが共感を呼びます。

連載〈斜眼斜行・7 十石峠にまぼろしを見た〉宮本研（劇作家）は、秩父困民党の暴動をたどる旅のレポートです。暴動90周年を記念して史跡探訪のバスツアーがあり、それに参加し、秩父を巡ります。困民党の過去と今を交錯しつつこの事件の意味を劇作家らしく描き出します。

連載〈スポンサーにおける広告社会学・23 シャープ〉小見啓（評論家）は、シャープの商品について実感を交え体験的に考察しています。シャープ・ペ

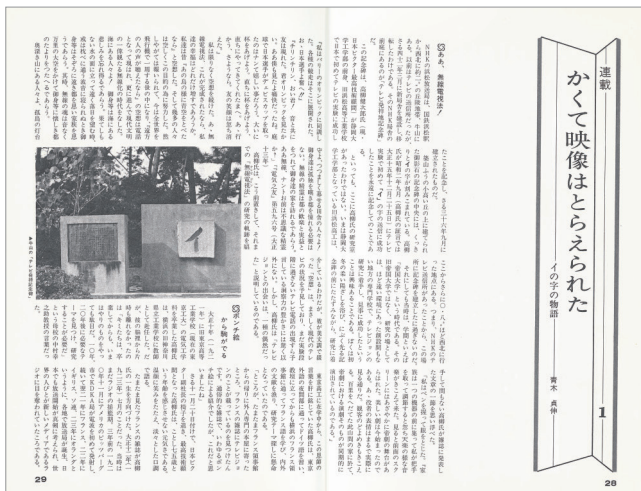


1975年1月号の連載〈スポンサーにおける広告社会学・23 シャープ〉



1975年1月号の〈新春対談・昭和五十年をむかえて〉

おかだ よしろう●1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長を経て電通総研常任監査役。98年退職。70年の大阪万博では、『笑いのパビリオン』を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』（電通）、『観劇のバイブル』（太陽企画出版）、詩集『散歩』（思潮社）、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』（講談社）など。



1975年1月号の連載〈かくて映像はとらえられた・1 イの字の物語〉



1975年1月号の連載〈斜眼斜行・7 十石峠にまぼろしを見た〉

ンシルの発明から始まって、電子レンジ、オーディオ、テレビ、カセット録音機などの話題を自在に巡りながら、シャープというアイデアいっぱいの企業がとても恥ずかしがり屋でナイーブな会社であることを報告します。

連載〈体験的戦後映像論・15〉大島渚（映画監督）は、戦後社会を描き出しながら映画とテレビの映像の違いを論じます。テレビジョンが、映像を映画館の暗い空間から解放し、映像が夢見る時代から覚醒の時代に入ったことを大島渚特有の熱っぽい語り口で述べています。

〈鼎談・市場判別帳／予測・今年の市場環境〉は、景気や投資動向、物価の推移から広告界の見通しまで幅広い話題を簡潔にレビューします。

〈JNN データバンクから・34〉は、花の高1トリオ、桜田淳子、森昌子、山口百恵の各ファンの違いに関する分析です。

エンターテインメントを斬新な切り口で評論

2月号の全体の構成は1月号とほぼ同

じです。〈ニューメロドラマへの展開〉藤竹暁（NHK放送文化研究所主任研究員）は、「愛染かつら」に始まり「君の名は」を経て「白い滑走路」で頂点を迎えたメロドラマの歴史の変遷を分析します。そして最もシリアスなドラマ以上にその時代を正確に反映するようになったこれらは「ニューメロドラマ」というべきものになっていると記します。

〈宮ぬき「紅白」論〉松尾羊一（評論家）は、宮田輝のいない紅白歌合戦の話の枕に、ポスト宮田のNHKアナの品定めをしています。

〈フルトヴェングラー氏に聞く〉小見啓は、2種類の全集が出てブームになっているフルトヴェングラーへの架空インタビューの形式でレコードを紹介しています。

〈ガベージ産業考現学〉田吹日出碩（ルポライター）は、レストランの食べ残しの使い回し、遺失物の傘やハンパ物、傷物の衣類、天かす、塩化ビニール、端尺のフィルムなどの再利用から始まり、中古商品の再生の事例をルポしています。そしてガベージ論は緊急の課題だと語ります。

連載〈かくて映像はとらえられた・2 父たちの物語〉高橋呉郎（評論家）は、前号に引き続き、「テレビの父」ともいべき人物たちを追っています。ベルリンのニポー、ロンドンのペアー、東京の曾根有という3人のテレビジョン開発への取り組みを臨場感豊かに描いています。〈ニュースの視点・2 坂已知夫〉は、南北朝鮮の間の非武装地帯での軍事的衝突について新聞、テレビの報道から解説し、意見を述べます。

〈ヨーロッパ通信・1〉三輪晴啓（西ドイツDW日本語放送課勤務）は、国際放送〈ラジオ・ジャパン〉のヨーロッパでの受信状況について報告しています。二百数十人の国際放送スタッフが世界の各地域に向けて日々送る情報は、ゼロに近い聴取率しかないにもかかわらず、その意味を信じて電波を送る心意気が伝わります。

〈年表 テレビジョンの20年〉〈スポンサーにおける広告社会学〉〈体験的戦後映像論〉などの連載は、それぞれ貴重な記録になっています。

*肩書は当時のものです